

## マタイ受難曲と私

マタイ受難曲(以下マタイと略す)との最初の出会いは当時通っていた青山学院中等部3年生の初夏(昭和28(1953)年)だった。それも演奏会でもレコードでもなく映画だった。その春に大学を卒業して赴任してきたばかりの若い担任の男の先生がホームルームの時間に「西洋音楽の最高傑作は何だか知っているか、ドイツの作曲家バッハのマタイなんだ。今その映画が上演されているので希望者は連れて行ってやる」と云ったので悪童どもが沢山居たクラスの半数以上が土曜日の午後、確か新宿の映画館に先生に引率されて出掛けたのである。映画といってもイエスの受難物語を劇化したものではなく、ラファエロ、ダヴィンチ、ティツィアーノなどの泰西名画が白黒のスクリーンに入れ替わり映し出され、マタイが背景音楽として流されるという代物だった。時間にして1時間半、ミッションスクールだったから多少の聖書の知識はあったにしても、薄暗い聖画に陰気な音楽ときては退屈そのものでひたすら眠かった覚えがある。しかし保存していたパンフレットを今見ると、このマタイは時間的に全曲ではないとしてもカラヤンの指揮、ソプラノのシュヴァルツコップを始め往年の名歌手とウィーンフィル・合唱団による豪華メンバーの演奏だったのだ。



映画「マタイ受難曲」のパンフレットの一部

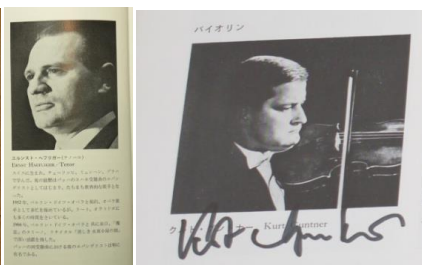
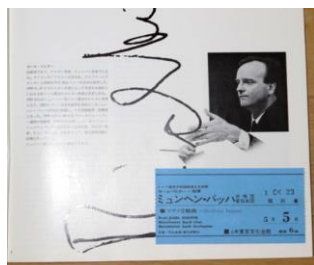


クレンペラーの「マタイ」のレコードケース

そんな記憶もあつてか高校時代からクラシック音楽を聴くのが趣味となり、メサイアは大好きだったし演奏会にもちょくちょく行くようになった。社会人になってからまず買ったのがオットー・クレンペラー指揮のマタイの全曲レコードだった。5枚組のLP盤で6000円、初任給が14000円だったから当時としては相当な出費だった。イギリスの名歌手ピーター・ピアーズの福音史家、フィッシャー＝ディスカウのイエス、シュヴァルツコップ(S)、クリスタ・ルートヴィヒ(A)、ニコライ・ゲッダ(T)、ヴァルター・ベリー(B)、フィルハーモニア管弦楽・合唱団による演奏をそれこそレコードが擦り切れるくらい聴き入ったものだ。まだ当時のレコードは手元にあるがプレイヤーを使わなくなったのでずっと聴いてなかったが、昨年CD化されたので早速購入した。驚いたのは210分(3時間半)を越える演奏時間。最近の愛聴盤であるアーノンクルのマタイは古楽器演奏のせいもあるが160分ちょっとで何と50分近くも長いのだ。第1曲や第29曲、コラールなど倍近くの差がある。しかし大河の流れのようにゆったりとした壮大なマタイはわが青春時代を思い出して実に懐かしい。

そしてあの伝説的なカール・リヒター指揮ミュンヘンバッハ合唱団・管弦楽団のマタイの来日公演を東京文化会館の大ホールで聴いたのは昭和44(1969)年5月5日の夜。結婚して1年目の家内は和服を着て出掛けた。チケットは当時としては高額の5千円だったが入手には苦労した。1階の最後列から2番目の席だったが来日前からレコードなどで評判を聞き知った聴衆で会場は超満員、期待を込めた熱気に満ち溢れていた。舞台にてんでに登場した100名程のアマチュア合唱団員はいかにもドイツの田舎から出てきたようなおばさん、おじさん達。それがゆったりとした序奏のあと Kommt, ihr Töchter を歌いだしたらその迫力

の凄いいこと、一遍に惹き付けられた。その時は気付かなかったがリピエーノの児童合唱はなく女声団員の中から出したようだ。台上のリヒターは小柄だが端正な面立ちで毅然たる指揮ぶり。傍らにチェンバロを置き通奏低音も引き受ける。そしてテノールのエルnst・ヘフリガー、その後何10回とマタイを聴いているが彼以上のエヴァンゲリスト(福音史家)に出会ったことはない。ペトロの否認の場でイエスの言葉を思い出し、und ging heraus und weinete bitterlich(外に出て激しく泣いた)の悲痛を極めた絶唱がホール天井に弧を描いて消えていく様は今でもはっきりと脳裏に残っている。その後のアルトの有名なアリアなど深い感動に打ちのめされた3時間半だった。日本では初めてのカットなしの全曲演奏だったという。リヒターはその10年後合唱団と再来日の予定でチケットも買ったがその直前に心臓病で54歳の若さで亡くなってしまった。



1969年来日公演のチケットとプログラムの一部(左からリヒター:ヘフリガー:グントナー)

2008年コンサートのチラシ

これには後日談があり、その時のコンサートマスターのクルト・グントナーが40年後日本に滞在していてヴァイオリンリサイタルを開くというのでサインを貰おうと保存していたプログラムを持参し聴きに行った。舞台上に登場した彼は随分と高齢に見えたが当日のプログラムを見るとモーツァルトの183回目の誕生日にミュンヘンで生まれるとあった。実は私の誕生日もモーツァルトと同日(それが唯一の自慢の種)なので幾つ歳が違うか演奏が始まってからもそちのけで計算してみたら何と全くの同年生まれだった。休憩時間に訪れてその旨話すと向こうもびっくり、喜んで若き日(30歳だったのだ)の写真にサイン(上掲)をしてくれた。

私がマタイを歌いだしたのはバッハの没後250年の2000年。家内の先導で合唱をやりだしたのは50歳を過ぎてからで当時は第9やオペラ・男声合唱などに興じていたが、合唱仲間の清水禮子さん(ハルモニーコールの創立者の一人)に誘われて湘南の合唱団のマタイを聴いた。これなら自分でも歌えると思い、彼女が入っていたバッハ・アンサンブルコール(名古屋を本拠とし指導者は三澤洋史先生)横浜支部のマタイの練習に夫婦で参加させてもらった。練習会場は清水ヶ丘教会の幼稚園の上にある丘の上チャペル(現在は閉鎖)で団員には現楽事委員の新井さんもいて色々教えて貰った。しかし初めてのマタイは何とも難しく消化不良のまま翌年の6月名古屋での本番を迎えた。歌えなかったという不満に強くかられて帰りの新幹線の車中で清水さんにまたまた頼み込んでマタイを練習中の明治学院バッハアカデミー(指導者はバッハ学者として有名な樋口隆一先生)にも入団することにした。そこでのマタイは初期稿版で第29曲は O Mensch のコラールファンタジーではなく素朴ともいえるコラールで面喰った。2002年3月の本番の会場は文化遺産の明学白金チャペル、古楽器の名手達との共演で雰囲気的にも内容的にも感慨深いものがあった。この合唱団では在籍10年間にロ短調ミサ、クリスマス・オラトリオ、ヨハネ受難曲(第2稿)、さらに2008年にはバーレンライター版によるマタイの2夜公演などバッハの大曲を思う存分歌うことができた。なかでも2006年にライブツィヒ国際バッハ音楽祭に招待され、ヨハネ初演の地である聖ニコライ教会の日曜礼拝で歌い、マタイ初演の聖トーマス教会でロ短調ミサの演奏を聴けたのは私達夫婦にとって一生の宝である。

4回目のマタイはこの4月横浜マタイ研究会による県立音楽堂での公演だった。この時は歌うばかりでなく字幕の対訳も担当したので大変だったが、漸くにしてマタイの全貌が解かってきたかななどの思いがある。さてハルモニーコール第10回定期演奏会は私にとっては5回目のマタイとなるが、どんな感慨を持って歌えるか今から楽しみである。(楽事委員 山田 武)

【後記】この暑さに固い読物ばかりではと思い今回は個人的なマタイ体験談にしました。皆様の中にも色んなマタイ体験をお持ちの方がおられると思いますので是非楽事委員にお寄せください。特集号を出したいと思います。(山田)